



タイトル Title	与党は勝利したのか
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	東亜,491:
刊行日 Issue date	2008-05
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001587">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001587</a>

「与党は勝利したのか」

4月9日、韓国では国会議員選挙が行われた。大統領が絶大な権力を与えられたこの国で、国会議員選挙は特殊な位置を占める存在である。果たして、李明博政権と与党ハンナラ党にとって、その「勝利」はどのような影響を与えるのか。選挙後の展望と併せて考える。

わが国ではあまり知られていないが、現在の韓国の政治制度は、様々な意味で、世界的に見てもユニークな性格を数多く有している。法案提出権と拒否権という、「二重の権力」を与えられた強力な大統領の権力はその最たるものだ。今日でこそ、用いられなくなったものの、金大中政権当時までは、わが国の首相に当たる国務総理の指名においてさえ、「国務総理署理」、つまり、首相代理を任命することで、国会による行政への介入を排除することもできた。加えて、未だ我々の記憶にも新しい2004年の盧武鉉大統領に対する国会の弾劾の失敗は、韓国の国会から、大統領の権力をけん制する最大の武器を事実上失わせた。

このように韓国の政治制度においては、大統領に大きな権力が与えられる反面、国会の権力は制限されている。しかしながらもちろんそのことは、韓国政治において国会が無意味であることを意味しない。何よりも国会は国会であるが故に、予算案や法案を可決する権利を有しており、如何なる大統領と雖も、国会の協力なしに国政を運営することは不可能である。韓国の国会議員選挙はわが国と同じく小選挙区・比例代表並列制で行われる。だからこそここでの結果は、慶尚道を強固な基盤とするハンナラ党と、全羅道にて圧倒的な支持を受ける民主党との、地域対立現象が依然として存在するこの国において、首都圏その他の地域における、「大統領選挙に向けた陣取り合戦」としても、重要な比重を占めている。

一言で言うなら、韓国における国会と国会議員選挙は、強大な権力を与えられた大統領の暴走を止め得る具体的な権限こそ有していないものの、これをけん制する程度の力は有している。

そして、韓国の大統領と国会の間関係を考える上で、もう一つ見逃されてはならないのは、大統領と国会議員が異なる任期を有している、ということである。大統領は5年、国会は4年。加えて、韓国の大統領は国会を解散する権限を与えられておらず、また、国会による大統領弾劾も極めて困難であるから、両者は大統領選挙を基準にして、毎回、1年ずつ接近して行く。それぞれの関係は、足掛けで、盧泰愚政権が5ヶ月と4年4ヶ月、金泳三政権が3年5ヶ月、金大中政権が2年5ヶ月、そして盧武鉉政権が1年5ヶ月。その関係は恰も太陽の周りを回る地球と火星や金星等の惑星達と同じにさえ見えてくる。

そして、今回の大統領選挙と国会議員選挙の関係は、1980年代末の盧泰愚政権以来の「大接近」に当たっている。もちろん、このような状況は、李明博大統領と与党ハンナラ党に有利なように見える。大統領選挙当時の50%を越える支持率からは大きく落としたと

はいえ、ハンナラ党は依然として 40%近い支持率を維持しており、これに対する最大野党民主党の支持率は 15%にも満たないでいる。盧武鉉政権を支えた「改革派」人士の多くは、依然として、現在の民主党の中に包摂されておらず、保守層の中の反ハンナラ党勢力も、様々に分裂してしか、総選挙に臨むことができなかった。加えて就任したばかりの大統領は、経済状況をはじめとする今日の状況の責任を、「自らの政権」の政策の結果ではなく、「先の政権」、つまり、盧武鉉政権の失政の結果であると転嫁することもできた。

こうして考えるなら今回の国会議員選挙で、与党ハンナラ党が勝利を収めたのは当然のようにも見える。しかし、ここで忘れてはならないのは、韓国における歴代の国会議員選挙が、単なる与野党の攻防以上の意味を有している、ということであろう。即ち、韓国歴代の政権は、この国会議員選挙の機会を利用して、前職或いはレイムダック化した現職の大統領、更には与党内における自らの対抗馬達の勢力を駆逐する絶好の機会として利用してきた、ということであろう。先にも述べたように、韓国では小選挙区・比例代表並列制を採用し、また、国会議員達は、例えばわが国の嘗ての自民党国会議員たちが有したような「後援会」に匹敵する、十分な支持組織を有していない。だからこそ、個々の選挙区での候補者の当落において、政党からの公認の有無は決定的な意味を有している。

このように言うとは賢明な読者の中には、筆者の説明は矛盾している、と考えられる方もおられるであろう。盧泰愚政権の民主自由党、金泳三政権の新韓国党、金大中政権の新千年民主党、そして盧武鉉政権のウリ党。時に「韓国の大統領には、一人当たり一つずつ新党を結成する自由がある」と言われるように、韓国では新しい政党ができては生まれる、ということが繰り返されている。だからこそ、そのような政党の公認はさほどの意味を持たないように思われるかも知れない。

しかしながら、この状況は次のように考えるとわかりやすい。結局、韓国の政党とは、大統領選挙に対備する為に作られた、将来の大統領有力候補達を中心とする政党である。従って、各々の政治家がこのような政党に属するということは、自らが将来の大統領有力候補と密接な関係を有しており、自らの地域に何らかの「利益誘導」を行うことが可能である、ということの意味している。言葉を変えて言うなら、無所属である、ということは即ち — 自ら自身が大統領有力候補でなければ — 強大な権力を誇る大統領となる人物との可能性が薄い、ということの意味しており、当然のことながら、有権者にとって、このような候補者に投票することの「旨味」は大きく損なわれることとなる。

そしてだからこそ、李明博大統領も、この国会議員選挙の機会を利用して、党内の「粛清」に乗り出した。言うまでもなく、粛清の対象は大統領選挙でハンナラ党の公認を争った朴槿恵と彼女を中心とする派閥である。結果、大量に公認漏れした彼等は、事実上の新党を立ち上げて選挙を戦わざるを得ない状況に追い込まれた。李明博の朴槿恵追い落としは、少なくともこの国会議員選挙の段階までは確実に成功しているかに見える。

とはいえ、このような国会議員選挙を利用した党内粛清は、李明博にとって諸刃の剣、ともいえる性格を有している。何故ならそれは、朴槿恵派を少数ながらも決定的に党内野

党の地位に追い込むのみならず、有権者の間における李明博に対するイメージを確実に悪化させて行くことになるからである。なるほど李明博とハンナラ党は、今回の国会議員選挙に勝利した。しかしながら、仮にハンナラ党の主流が完全に李明博派によって占められてしまえば、ハンナラ党もまた、李明博と運命を共にせざるを得なくなる。

国会議員選挙における勝利は、結果として、李明博派の覇権を明確なものとし、彼等はやがてその矛先を、朴槿恵だけではなく、他の有力候補者達にも向けて行くことになるだろう。その時、ハンナラ党はどうなるのか。大統領選挙と国会議員選挙。二つの選挙における明確な勝利が、逆に彼等を苦しめることになるのであれば、皮肉である。